

ベルリン在住日本人アーティストの選択と生活

— 移動と滞在のはざままで

立教大学社会情報教育研究センター
助教 高橋 かおり

Decisions and lives of Artists from Japan in Berlin

— Between residence and migration

Kaori Takahashi, Assistant Professor
Center for Statistics and Information
Rikkyo University

Abstract

Berlin has been to attract a lot of artists from different art genres. Japanese is not the expansion of this. This research is to clarify how artists from Japan construct their meaning of artistic activities in Berlin-based on the interviews. I will consider the creative network among international, German, and Japanese communications. Because of getting difficult to have an artist Visa, most of them don't hope to stay Berlin entire their lives but want to live there as long as possible. Also, in Berlin, they become consider their ethnicity as Japanese, and their artistic activates are affected by their image as Asian or Japanese. We need to view artists' carrier not as a straight way but as round trips not only between Japan and Germany but also all over the world.

More diversity in interviewees' gender (all were female) and location (more than two places) would be desirable in follow-up research. There is also the option of using surveys among German language students in Japan to provide quantitative data. Furthermore, deeper content analysis of franchises related to Germany that examines the exact inspirations, origins, and supposed references would be a valuable contribution toward a better understanding of this phenomenon. Last but not least, all of this seems to be a relatively new trend, especially in relation to Attack on Titan and Hetalia. It is important to assess the long-term development and relevance of this phenomenon, because the Attack on Titan franchise is scheduled to end soon, and one cannot forecast whether there will there be a similarly popular media franchise that draws on German motifs in the near future.

1. 本稿の目的

本稿では、芸術家（アーティスト）のキャリア選択と職業意識について、ドイツ、とりわけベルリンを拠点に活動する芸術家への聞き取りをもとに論じる。彼らが渡独した経緯を踏まえ、芸術活動を継続する場所の選択と自身の活動との関連を見ることで、異文化を越境しながら芸術活動をすることの意義と、その過程からわかる芸術家の生活について考察する¹⁾。そして本研究を通じて得られた今後の日独文化交流の示唆を提示する。

2. 芸術家研究とベルリン

国際的に移動する芸術家を対象としたフィールドワークやインタビューにおいて、ベルリンはその例として取りあげられやすい。例えば、ロンドンやニューヨークとの比較研究では、制度

化され資本主義が支配する街にはない魅力がある場所としてベルリンが対比的に論じられる。クラシック音楽 (Scharff, 2018) やファッション (McRobbie, 2016)、あるいはビジュアルアート (Jacob, 2009) など、分野は多岐にわたる。あるいは EU 内での大都市としてベルリンがみられる場合もある。フィンランドの美術作家に対して行った諸研究では、フィンランドよりも大きく、発展しており、国際的に芸術活動を行う際には非常に便利だと語る美術作家の言葉が取りあげられている (Hirvi, 2015; Hautala & Nordström, 2019)。

ベルリンは、ニューヨークやロンドン (あるいはパリ) のような世界都市に比べれば小規模で経済活動も活発ではないが、大陸ヨーロッパ (あるいは EU 圏内) では比較的大都市であり、それらの場所と比較すると都会としてみなされる²⁾。文化や芸術も多様な分野を受け入れている。クラシック音楽のように西洋の伝統的・権威的芸術分野に惹かれてベルリンを選択する人もいれば、劇場文化が盛んなことから美術やダンスなどの分野に興味を持つ人、あるいは写真やクラブミュージックなどより前衛的分野の活動を求めてくる人などさまざまである。その人がどのような背景を持っているかによって、ベルリンの見え方や意味づけは異なるのである。それはベルリンが東と西、あるいは個別の地区ごとに異なった特色を持っていることにも由来しよう。

日本人を対象とした芸術家、あるいは文化や芸術に関わる人を対象とした研究は、藤田結子のニューヨークとロンドンへ行く若者を対象とした藤田結子の諸研究と、日本人も含めたアジア人クラシック演奏家の活躍を探求した吉原真里の論考の2つがあげられる (藤田 2008; 2013, 吉原 2013)。この両者の研究に共通する問いは、調査対象者がいかにして「日本人らしさ」「アジア人 (東洋人) らしさ」と向き合っているのかというものである。日本人であるというエスニシティが資源として活用される場合もあれば、スティグマとして足かせになる場合もある。演奏は演技、踊りなど、身体が晒される表現活動のみならず、デザインやファッションにおいても、「日本人らしさ」から逃れることができない。

藤田と吉原の研究は、日本と海外を切り離し、海外で活躍する (あるいは活躍できなかった) 日本人という比較文化研究の意味合いが強い。しかし、芸術家のなかには、日本と海外を行き来し、複数の拠点を移動し続ける人もいる。そしてこのような滞在と移住の繰り返しは芸術家に特有の活動ともいえるのである。つまり、日本を捨てて海外へ、海外で失敗して日本へ、というように海外で活動することを切り離して考えることは難しいのである。

そこで本稿では、芸術家の移動や居住地選択を可能にする要因を明らかにしたうえで、その経験が芸術活動に与える影響について考えていきたい。

3. 調査方法

本稿では、2019年4月から9月にかけて、東京ならびにベルリンで実施したフィールドワークとそこでのインタビューを分析対象とする。まず調査協力者 (インタビュー対象者) は、機縁式で募った。筆者が過去に実施した調査の縁をもとにして、「日本で芸術の高等専門教育を受けた後、または実践経験を積んだ後、ベルリンに拠点を移した芸術家」を対象とした。そのため、インタビュー時点で学生である人や、海外で生まれ育った人、日本の大学を経ずに直接海外で芸術の高等専門教育を受けた人は除外している。

インタビューは平均して1時間半程度であり、長い人は2時間半を超える場合もあった。一部を除き、筆者（高橋）と共同研究者（相澤）の2名で実施した。インタビューは録音し、文字起こしをした上で内容を確認してもらっている。この確認において補足情報やその後の経過情報を得た場合もある。なお、フィールドワークにおいては、調査協力者の関係する施設（スタジオや工房など）の見学を行った。

調査協力者11名のうち、美術作家が7名、演劇関係者が2名、音楽家が2名である。男性が5名、女性が2名であり、年齢は30代中ごろから40代前半までが中心層であった。ベルリンに来た人は、最も早い人が2007年、一番新しい人が2019年であった。1名を除き、2020年3月現在もベルリンに在住している。

以下では、彼らの基本情報と語りの一部を引用しながら調査を概観し、ベルリンに来た経緯、ベルリンにとどまった経緯を確認し、それぞれがベルリンでどのような活動を行っているのかを、みていこう。

4. ベルリンの意味づけ

(1) ベルリンに来た理由

藤田が調査地としてイギリスやアメリカと比べ、ドイツを渡航先とするのは「なんとなく」ではない理由を持たなければならない。確かに、ワーキングホリデーのビザが取得しやすいこと、大学の学費がほとんどかからないことなどのメリットはありつつも、ドイツ語を学ばねばならない、とりわけベルリンの場合は日本からのアクセスが良くないなど、いくつかの阻害要因もある。そしてドイツの場合、これらの情報は英語圏諸国に比して得にくい。

調査協力者たちがドイツ、ベルリンを選択した理由として、ドイツ国内でもビザが取得しやすいこと、受入先（レジデンス施設、合格した学校）があったこと、大陸ヨーロッパの中で交通の拠点となっていることなどのほかに、英語でも生活できる、すでに友人がいたなどが挙げられる。そして多くの方は、複雑な歴史を背負った街としての魅力を語っていた。例えばBさん（舞台スタッフ）は、もともとイギリスでのワーキングホリデーに応募をしていたが、なかなか申請が通らなかった。そして5回目の申請をする際に、イギリスでは継続したビザ取得が難しいことを危惧し、イギリス行きを断念した。そしてオランダとドイツを次の候補として考えたとき、ドイツにある「訳わかんないぐちゃぐちゃした」要素に惹かれたという。彼のこの言葉の背景には、ドイツの歴史的な経緯や未だに開発の進むベルリンの雰囲気などが反映されていたのであろう。そしてBさんは、ドイツでのワーキングホリデーに応募することになった。

さて、ベルリンで生活する際、どの言語を使うのかということと、どのような人と交流するのかということは深い関係を持つ。もちろんドイツ語ができれば問題はないとはいえ、できなくても暮らしていけるのがベルリンのメリットでもありデメリットでもある。なかには来独の時点でドイツ語が全くできない人や、ある程度の年数を住んでいても会話で使用する言語の中心が英語の人もいた。とりわけ、ベルリンでの定住（今のところ）考えていない人や、国際的な拠点の1つと考えている人は、ドイツ語習得に時間や労力を割く代わりに別の活動に励む傾向があった。さらに、ベルリンはある程度の日本人がいるため、日本語によって成り立つネットワークもある。例えば展示会の搬出入や制作アシスタントなど、共通母語を持つことによっ

て仕事が円滑に回る場合もある。

ベルリンに来た理由として、友達がすでにいたという人もいるが、その場合の友だちは、日本語で話す友人のこともあれば、英語で話す友人のこともある。とりわけ前者の場合は、日本での芸術に関する友人関係からつながっていることが多い。

ベルリンはドイツでありながらも国際的であり、かつ日本との関係もある程度維持が可能な環境にある。現地に根づく関係とドイツ語、国際的な関係と英語、母国的関係と日本語と、どの関係性と言語を選択するのかということは、それぞれの芸術活動に密接に結びついているのである。

(2) ベルリンに留まる理由

学生として、あるいはワーキングホリデーを利用してベルリンに滞在している中で、ビザの更新は避けて通れない。調査協力者のうち1名を除いてみなビザを更新しているが、なぜベルリンでの滞在を続けようと思ったのか、その理由はさまざまである。

例えばドイツでの美術大学卒業時に共同でのアトリエ運営を始めたばかりのHさん(美術作家)は、その運営を軌道に乗せるために卒業後の帰国は考えていなかった。あるいは、ワーキングホリデーで1年間滞在したJさん(美術作家)は、ワーキングホリデーが終わるころに「楽しすぎて。あ、ちょっとこれまだ、まだ、住みたいな」と思い、一時帰国前に次回来独時にビザが取得できるよう準備をし、一時帰国後再びベルリンにわたった。

学生ビザやワーキングホリデーでの滞在ののちに調査協力者たちが取得するビザはフリーランスビザ、なかでも芸術活動に限定されたアーティストビザである。推薦書やポートフォリオ(過去の作品や活動をまとめたファイル)などをそろえてこのビザを申請し、無事に取得した場合、収入を得る活動は原則として専門とする芸術に限定される。手軽なアルバイトが出来なくなるデメリットがある一方、芸術家(アーティスト)としての承認を得ることができるともいえる。そしてベルリンはドイツの中でもアーティストビザの申請を歓迎している街でもある³⁾。

ただしこのように芸術関係者を受け入れた結果、芸術家が過剰になってしまっているという問題がある。とりわけベルリンは他のドイツの大都市に比べて経済活動活発であるわけではない。ベルリンの生活費が安いと、収入が少ない芸術家でも生活が可能なのである。近年の急激な家賃上昇の中で芸術家の生活も苦しくなっており、アトリエの確保も難しい。10年前に来た芸術家たちが見ていた景色と、今日の景色では相当変化しつつあるのである。

(3) ベルリンにおける芸術活動の障壁

それでは、日本出身の芸術家たちの持つエスニシティは彼らのベルリンでの芸術活動にどのような影響を持っているのだろうか。ベルリンでの活動において、日本人(アジア人)であることをうまく利用している例もある。Eさん(俳優)は、舞台活動をしつつ、映像作品におけるエキストラの仕事をしている。中年のアジア人男性の見た目をもち、かつ日本語を流暢に話せる人はベルリンにおいてほとんどいないために一定の需要があり、継続して仕事をするのが可能となっているのではないかと、Eさんはこの理由を分析する。ドイツ語で台詞を話す演

劇作品に出ることもあるものの、Eさんが日本語話者であることは他の俳優との差異化の材料となりえる。

また、美術作家の中には、自身の作品に「東洋的」「日本的」要素を見出されることがあると話す人もいた。Cさん（美術作家）は、自身の作品のモチーフがベルリンであるにもかかわらず、観客から「日本的だ」と評されたことがあり、「そういうの面白いな」とも話していた。あるいはFさん（美術作家）は、自身の作品がドイツで受け入れられている理由を次のように話していた。

たぶん日本的なんだけど、どっかそうだけじゃない要素みたいなのがあって、たぶんドイツの人から見るとすごい日本的に見えるんでしょう。所作みたいなのが。形の所作みたいなのが。けどなんか違うみたいな違和感がいわゆる現代アートの場所じゃないですか。そんな中でそうじゃない違和感。

Fさんが、自身の作品が日本的でありながらオリエンタリズムを強調するような典型的な日本らしさではない性質（「違和感」）を持つことを自覚できたのは、ベルリンでの制作や展示活動を通じてのことであったという。

このように、アジア人、あるいは日本人としての個性を生かしつつ、芸術活動を続けていくにはベルリンは利点の多い場所である。例えばIさん（音楽家）とKさん（音楽家）は、学位は別の海外都市で取得しているものの、仕事を行うための移動拠点としてベルリンに居を構えている。このように様々な人を受け入れる国際的な都市である。しかし、深く長期間その土地に根差すとなるとそこには障壁がある。IさんとKさんはドイツ国内での学位を持っておらず、ドイツ語も得意ではないため、拠点はベルリンであるがドイツ語圏での仕事はなかなか得られないと話していた。語学についてはBさんも同様に話しており、とりわけ現地の企業や団体での就職においては一定レベルのドイツ語は要求される。

調査協力者の中では、パートナーがドイツ人であり、配偶者ビザを取得している人を除いて、ドイツに永住しようという意思は必ずしも強くみられなかった。ビザが更新できなかったら日本に帰る、あるいはほかの国に居を移すという考えが多く聞かれた。彼らの選択や生活を的確に分析するには、「日本からドイツ」という片道、「ドイツから日本」という一往復だけではなく、常に流動的な存在として、あるいは複数の拠点を行き来しうる存在として芸術家をとらえることが必要なのである。

5. 今後の日独文化交流に向けて

本稿では、ベルリンを拠点とする芸術家のインタビューから、日本とドイツの二つの背景を持つ芸術活動のあり方について分析してきた。これまでの文化交流研究は、コンテンツの内容分析やファンの受容研究が中心であり、その作り手に目が向けられることは多かったとはいえない。しかし、文化や芸術を専門的に作り出す人々の活動の中には、今後の文化交流の萌芽となりうる要素や、それを阻害する要因などを見出すことができよう。さらに、本稿の知見は完成された作品や表に出てくる活動の舞台裏に関する聞き取りでもあり、作品に結実する前の萌芽的活動や挑戦を始めたばかりの人にも接近することが可能であった。

グローバル化が進む中で、モノのみならず人々の移動もますます活発化していく。海外に行くことは「日本を捨てる」ことでもなく、海外からの帰国は「海外で負けた」からではない。複数の拠点や関係性を持ち、移動と滞在を繰り返しながら、その多重性の中で活動を続けていけるのが今日の芸術家なのである。

注

1) 本報告書は2019年度山岡文化財団助成課題「ドイツ在住日本人芸術家のキャリア形成に関する比較研究」の成果の一部であり、共同研究者は相澤真一（上智大学／教育社会学）である。なお、本調査は2017年度に実施した調査の追加調査である（一例として高橋2018; 2019）。

2) 調査過程においてベルリンのイメージの理解として「20年前のニューヨーク」という表現をする人にしばしばであった。あるいは「20年前のニューヨーク」といったときにほとんどの場合で相手からの同意が得られた。

3) アーティスト協同組合 (bbk) のサイトではベルリンは「芸術と映画の都」と見なされているため、芸術の経済的な関心から、自営業のアーティスト、音楽家、俳優、映画関係者やそのほかの人々は、ベルリンの滞在許可が与えられます」という案内が英語で書かれている。

<https://www.bbk->

[kulturwerk.de/con/kulturwerk/front_content.php?idart=3193&idartlang=3575&idcat=174&changelang=7](https://www.bbk-kulturwerk.de/con/kulturwerk/front_content.php?idart=3193&idartlang=3575&idcat=174&changelang=7)

(2020年3月29日確認)

参考文献

藤田結子, 2008 『文化移民——越境する若者とメディア』新曜社.

———, 2013 「欧米都市における文化生産と「日本らしさ」の構築：ファッション、デザイン、アートの制作者のエスノグラフィー」『社会学評論』63(4):519-535.

Hautala, Johanna, and Paulina, Nordström, 2019, “Creative city, mobility, and creativity: Finnish artists in Berlin”, *Mobilities*, 14(6):859-874.

Hirvi, Laura, 2015, “‘A suitcase full of art’: Transnational mobility among Berlin-based visual artists from Finland,” *Ethnologia Europaea*, 1:98-113.

Jakob Doreen, 2009, *Beyond creative production networks. The development of intra-metropolitan creative industries clusters in Berlin and New York City*, Berlin: Rhom-bos.

McRobbie, Angela, 2016, *Be creative: Making a living in the new culture industries*, Cambridge: Polity Press.

Scharff, Christina, 2018, *Gender, subjectivity, and cultural work: the classical music profession*, Abington: Routledge

高橋かおり, 2018, 「芸術家の海外経験が持つ意味——キャリア形成の観点から」山田真茂留編『グローバル現代社会論』, 66-82

———, 2019, 「芸術に関わり続ける工夫——在外芸術家の経験の分析を通じて」『社会学論集』18:67-18.

吉原真里, 2013, 『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか? ——人種・ジェンダー・文化資本』アルテスパブリッシング.